

# 景清のシラ



河竹繁俊

日向島の景清に用ふる人形のカシラは、——周知の如く——特殊なものである。縮緬張りで、兩眼をカツと見開くと、眼球をくりぬいたのを見せるために、まつかになつてゐる、あれである。

人形のカシラといふと、私は直ぐにあの景清が眼にうかぶ。文七や團七や檢非違使などを流用した立役のは、そのあとになつて浮んでくる。これには、二つの因縁があ

るやうに思ふ。

それは、いまの桐竹門造氏が、十數年前に、早大の演劇博物館に寄贈してくれたのが、景清の人形だつたのと、その少し前に、坪内逍遙先生のおともをして、四つ橋の文樂座へ行つた時に、桐竹紋十郎氏が持つてきて見せてくれたのが、やはり、景清だつたからだらう、と思ふ。

逍遙先生が、大阪朝日會館で開催された演劇講演會のために西下された時、ちやうどその頃新築開場した文樂座へ、主催の大朝社が招待してくれたのだつた。津太夫が日向島を語り、榮三が景清をつかつたと思ふ。が、たしか出遣ひではなかつた。

——それよりも、すつと後、東京の明治座で、同じ顔觸れで日向島の出た時には出遣ひで、前の時にもまして、榮三のつかふ景清の述懐といふものにすつかり打たれて、うむむ——たいしたものだ、と太息をついた。その時に、タタタタ——と、たつた一人り拍手を送つた人がある、ふと棧敷を見ると、それが申村吉右衛門だつた。たつた一人りの拍手などといふものは、とかく芝居の雰圍氣を破つたり、テレルものなのだが、この拍手はまつたくツポにはまつてゐたので、却つて効果的でもあり、當の吉右衛門はなほもデツと舞臺に吸ひよせられてゐたのだつた。此の榮三老の景清の味と、吉右衛門の拍手といふものが、私に深い感銘を與へて、時に應じて人にも話し、書きもしたことがある。

話は元へ戻るが、文樂座の時には、日向島があつて道中双六があつた。その幕間に、お茶を差し上げたいからとあつて、逍遙先生をお迎への人が見えた。二階の特別休憩室で、茶菓の接待にあづかつてゐるところへ、桐竹紋十郎が、さきほど舞臺の上に見た景清の人形を携へてあらはれた。さうしてそれが縮緬張りであることを説明したり、眼をあげて見せてく

れたりした。その後で逍遙先生と紋十郎とは、記念寫眞をとつたやうに思ふ。

その時の景清のカシラは、齋藤清二郎氏の『文樂首の研究』によると、古くから文樂座の所蔵にかかるもので、ノド木に新町扇屋三郎兵衛舊藏の焼印のあると記されてゐる、その景清だつたらしく思はれる。

右の齋藤氏の研究書はいい本で、こんど、景清のカシラや、縮緬張りのカシラそのものについて調べてみて大分教へられたことを感謝する。縮緬張りのカシラでは、景清をその最も著明なものとするとしても、法界坊・宗玄・阪田の金時の如きもさうであり、安達の老女岩手、伊賀越の母鳴見、朝顔日記の荒妙等にも使用されるとも見えてゐる。

また、宮尾しげを氏の『文樂人形圖譜』によつて見ると、この景清の縮緬張りといふものは、明和元年の初演時代からと傳へられる、とある。が、いつたい、この日向島のくだんだけは、享保十年初演の『大佛殿万代石礎』から取つてきたものだといふから、その頃からもう縮緬張りだつたのであらうか。あるひは、明和元年の時は越前少椽の追善とあつて、特殊の工夫をしたのであつたらうか。青竹の手摺がこの時なのだから、さういふことも考へられる。またこの時景清をつかつたのは、名だたる若竹東工郎であつてみれば、人形座頭ではあり、あるひは東工郎の發明だつたかもしれない。それ

から、他にも縮緬張りがあるのだが、この景清あたりが初めてだつたのかどうか。それらについては、どうか地元の方の御高示にあづかりたい。

それにしても、あの景清のやうな境遇の、ああいふ性格をあらはすために、あの灰色の縮緬張りといふ、光澤のない陰惨な感觸の顔面にした創案者は、おどろくべき審美的な藝術家だと言はねばならない。誰れが、どういふはずみに工夫し研究し、つくりだしたのでつたらうか。

○ 當代の桐竹門造氏が、演劇博物館へ景清の人形を寄贈してくれたのは、前記のやうに、もう十數年の昔しに屬する。ある夏の日——文樂がいつも東上する六七月のことだつたらうと思ふ。(もつとも調べれば、正確に分かるはずだが。)吉田榮三郎氏を連れて來館した。さうして「記念として、この人形を寄贈してもらひます」といふ、まつたく自發的、好意的な申し出でだつた。それが現在も襲藏展観されてゐる景清の人形なのである。

同氏の話によると、數ある蒐集品のうちで、最もよいと思はれる、この景清を選び、その衣裳には、これも年來珍藏してゐた刀袋の裂れをはいで、特に調製させたものだとの説明。なるほど古い金入りの織物をつぎ合せた、島の景清として申し分のない衣裳。話のきつかけから、榮三郎に左手をつ

かかせて使ひ方の實地説明もしてくれたのだつた。

この人形の頭は、齋藤氏の本にも見えてゐる、大江宗七作の逸品とおぼしく、じつによく出来てゐる。寫眞で見ると文樂所藏（むろん焼けたと思はれるが）のも結構だが、瘦せて頬骨の高くなつてゐるぐあひ、島の生活で衰へ果て、それが海風に吹かれ日にやけて、物凄しい灰色になつてゐる容子といひ、どうもまさるとも劣らぬ逸品だといつていいやうである。先日もある外人（ハンガリーから来て、八年間も日本の古美術を研究した人）が館へやつてきた時、この景清の人形「大いに感服して「これはいい人形です、いい人形です」と立ちどまつてしまひ、行きかけては振り返り、心から感歎したのも無理はない。

幸ひに、此の景清は、第一着の疎開荷物に入れて長野縣の山の中まで行つてきたが、別段の損じもなかつた。大阪では文樂はじめ諸家の所藏品が、多數焼亡したことと思はれるが、門造氏の多數の蒐集品はどうなつたのだらうか。少しでも疎開さしてあつてくれたら、などと案じながらツイそのままに打ち過ぎてゐる。文樂東上のをりもあらば、門造氏の好意にたいしても、改めて敬意を表したいと思つてゐる次第である。

それにつけても、文樂人形の整理——戦災後の整理もどなたかしておいてほしい。さうして各地にある三人遣ひ人形も調べて、出來のよいものは目録としてでも所在を明らかにしておくか、博物館的に、適當に蒐集しておくやうにしたいものだ。（二二・一〇・一八）

## おさんの涙

隨筆

森田たま

母の郷里淡路島は、人形淨りりのさかなな土地で、そのため産を失ふ者もすくなくなつたさうであるが、母の父もその一人であつた。村で三番目とか云はれた家屋敷を手離して、北海道へわたるやうな破目になり、晩年は娘の縁家先きである私の家へ引きとられて暮してゐたが、祖父は淨りりへの愛着を捨てたる事なく、每晚一本のお仕着せに陶然として、大きなゐろり端で何かを一段語つてから休むのがきまりであつた。

三勝半七とか、玉手御前とか、八重垣姫とか、壺坂とか、初菊とか、子供の私は淨りりによつて、さまざまな悲戀の物語をおぼえたが、中で一ばん好きだつたのは、阿漕ヶ浦平治住家ノ段といふので、時々それを注文して祖父に語つてもら